

衣服の再構築による制作の Arts-Based Research

川原 遼

(学籍番号: 21PE1055, 指導教員: 手塚千尋教授)

問題と目的

本研究は、Arts-Based Research(以下 ABR)による被服の制作を通して、「自ら着用したい服をつくる」行為に新たな意義を見出すことを目的としている。先行研究によりアイデンティティ獲得の高低とファッショントン行動の大小には相関があることが分かった。一方で、これらは既製服を選択・消費する行為に焦点が当てられていて、本人が身に付けたい衣服を自ら制作することに関しては研究対象とされていない。また、ファッショントンは人間のもうさ(=不均衡(鷺田, 2005, p. 166)を衣服の包み込む要素、及び自分のイメージを可視化できる要素で、自分の身体的イメージ、あるいは社会的イメージを形作ることも分かった。したがって、衣服を自ら制作し着装する行為を対象とする研究として、被服制作が自己のアイデンティティ形成に影響をもたらすかというリサーチクエスチョンの下、私のアイデンティティ形成に強く影響を及ぼしている古着を素材とし、解体・再構築による新たな被服制作を ABR で取り組むこととした。

方法

本研究では ABR を研究方法とする。ABR とは、芸術制作の特性を物事の探究や調査、意味や価値の創出に用いていくとする探究的で省察的な芸術制作の用い方であると同時に、研究の方法論と定義されている(笠原, 2019)。本研究では、自らが衣服を制作し、その体験を通して考察し記述することで「自ら着用したい服をつくる」行為に新たな意義を見出すこととする。制作では、①素材(着なくなった古着)の形状に着目してデザインを構想する、②デザイン画をもとに服をパツツや布に解体し、ミシンや手縫いで縫い合わせる、③その様子を動画で記録する、④作業中に考えたことを記述する、⑤記述した内容を後日「日記」として文章にまとめる、⑥制作のプロセスと制作した衣類を展覧会で展示する、という手順で行った。



Figure 1 素材①



Figure 2 素材②

結果

2024年9月29日から11月24日までの内の30日間、制作時間約42時間においてワンピース2着、ブラウス1着、ズボン1着、スカート1着、ヘッドドレス1つの計6つを制作した。制作時はテーマを設定せずに、集まった素材から発想し試行錯誤を重ねた。制作物を着装すると、袖部分をズボンの前身頃に使用したり、ポロシャツにワンピースの裾を足したりしたことで既製品ではない、程よい圧迫感がある着心地になった。技術不足から生まれた本来の衣服にはない無駄な皺も身体に沿い、違和感がなかった。したがって、私の技術、及び身体に合う、自分らしい衣服ができたと言える。



Figure 3 作品②の表面



Figure 4 作品②の裏面

日記の記述からは、制作頻度が高かった「フリル」「ほつれ」の部分にアイデンティティを重ねたこと、衣服とファッショントンに対する捉え方が「衣服・ファッショントンは懐が深く、一つの差別、区別もなく包み込む性質をもつ」へと変化したことが明らかとなった。特に後者については、制作の途中経

過として何度も試着したり、完成したものを着用したり脱いだりすることで、人間を包み込む布を制作していると意識して初めて、布の量、重力と素材の特徴の制限の中になるが、衣服の形、大きさ及びデザインが自由であることで、衣服は性別や階級、人種や生き物の種類、生死すら問わず、すべてを包むことができるという気づきを記述していた。また、KH Corderによる分析にかけると、2つのことが分かった。KH Coderとは、樋口によって開発された単語をカウントするような計量テキスト分析、または頻出度や関係性を測るテキストマイニングのためのソフトウェアである(樋口, 2020)。1つは、制作中に感じた自分の技術及び知識のなきに対する恐れや不安について伺えることだ。とくに形容詞においてプラスの要素をもつ形容詞(嬉しい、優しいのみ)が8%のみで、その他は怖い(マイナス)、太い細い(制作の修飾)が締め、制作中は不安や悩みを多く抱えていたことが分かった(Figure 5)。2つ目は、「正しさ」について関心が最も高かったことだ。形容詞の内で「正しい」という単語が最も使われていた(Figure 5)ことから、それが分かる。日記内の「正しい」は倫理や一般論としての「正しさ」とは違い、「自分にとって正しい」という「これでよい」と自己決定する気持ちを指しながら、用いられる文脈が出現の度に変わっていたので、自己決定について無意識的な自己内省が行われていたことが分かった。

形容詞	
正しい	5
強い	3
悪い	2
怖い	2
汚い	1
緩い	1
嬉しい	1
広い	1
細い	1
弱い	1

Figure 5 日記内で用いられた形容詞

考察とまとめ

今回の制作によってアイデンティティ形成の内特に「受容する」ことに影響があったと考察する。

日記の分析から分かった制作中に感じていた技術力に対する大きな不安が、27日目に理解した衣服とファッショニは「衣服・ファッショニは懐が深く、一つの差別、区別もなく包み込む性質をもつ」という気づきによって感化され、29日目には

技術による成功/失敗(曲がる/曲がらない)を「どうなるだろうか(いや、どうなってもそれで良い)」と楽しむ気持ちをもって衣服作りに取り組むことができた。一方から見たら失敗の産物である「ほつれ」という部分も、「自分らしい」と受け入れ、着用後も「自分の身体や自分の技術レベルに合う、自分らしい衣服ができた」とも感じた。衣服の再構築の行為を受容した結果、自分が制作した衣服という結果も「自分らしい」と受け入れることに繋がった。

これは衣服も自分も広く深く受け入れる「纏う自己受容」という行為だ。本研究で理解した衣服の寛容さのイメージから、衣服に関係のある「纏う」という言葉を使って名付けた。これは、鷺田が述べた、衣服が自分の不均衡な身体イメージ、社会イメージを支える表現の手立てだとするその先にある、自分に不均衡の要素をもたないで、衣服と共に身体イメージ、社会イメージ、及び自分自身の存在を健全に受容することと考える。

本研究は ABR を通して服作りに新たな捉え方を見出すことを目的として、ABR による被服の制作に取り組んだ。着なくなった古着を素材として、古着を解体して再構築することで新たな衣服を制作し、動画や日記による自己記述による記録をして、展覧会で作品を発表するプロセスを行い、衣服を作り着る当事者として服作り制作に取り組んだ。この ABR の探究によって、アイデンティティ形成の内特に「受容する」ことに影響があったことが分かり、本研究にて見られた「作っている過程、結果としての衣服、及びそれを行った自分自身を受け入れること」を「纏う自己受容」であると考察した。

主要引用文献

- 樋口耕一(2020). 社会調査のための計量テキスト分析 一内容分析の継承と発展を目指して— 第2版 ナカニシヤ出版
- 笠原広一(2019). 「Arts-Based Research による美術教育研究の可能性について」 美術教育学会誌, 40, 113-128.
- 鷺田清一(2005). ちぐはぐな身体: ファッショニって何? 筑摩書房

付記

本研究は著者による 2024 年度心理学科卒業論文「衣服の再構築による制作の Arts-Based Research」における研究の一部として行われた。